
守護霊始めました

微温湯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護霊始めました

【Zコード】

Z0617A

【作者名】

微温湯

【あらすじ】

通り魔事件の被害者となつて、命を落としてしまった香奈。幼馴
染の死に絶望する蓮の前に、突如香奈が幽霊になつて帰ってきた!
?ごく平凡だった二人が、非日常の日々の中でどんな成長を遂げる
のか。恋とバトルの痛快ライトノベル（自称）

プロローグ・五月一十四日（前書き）

以前書いていた作品と全く同じ名前ですが、全く別の作品として書き直しました。タイトルだけは気に入つてたんですね…

プロローグ・五月二十四日

夕暮れの街。ひつきりなしに車が通る大きな道路の上に架かつた歩道橋。急な階段のせいでほとんど利用者のいないその橋の上を、一組の少年と少女が手を繋いで歩いている。仲むつまじく話し、笑いあう一人の姿は、まさに幸せそのものだ。そんな一人で話しかけながら、前方から中年の男が近づいてきた。穏やかな笑みを浮かべた男は、丁寧な口調で二人に何事かを伝える。二人は、男と一緒に言葉を交わすと、会釈をしてすれ違つて行つた。そしてその数秒後、男は背後から再び二人を呼び止める。振り返つた二人の目に映つたのは、自分達に向けて弾丸の如く投じられた一本のナイフ。少年は咄嗟に少女を突き飛ばし、彼女を庇つた。少年の右腕にナイフが深く突き刺さる。少年はコンクリートの地面に倒れこみ、喉が張り裂けんばかりに悲鳴を上げたが、彼らの下を行き交う車の音は彼の声を無残にもかき消してしまつ。男は、そんな彼の様子を満面の笑みで見つめていた。しかし、今の男には先程までの穏やかな様子は微塵も残つておらず、その笑みは狂人のソレと化していた。男はしばらく少年の苦痛に悶える様子を眺めていたが、スーツの中から2本目のナイフを取り出すと、さらにその笑みを深くした。男は少女の方へ向き直ると、その一瞬一瞬を楽しむかのようにしてゆつくりと近づいてゆく。少女は少年に突き飛ばされた時に頭を強く打つて気絶していた。男は少女の傍にしゃがみ込むと、少女の衣服をナイフで引き裂き始めた。少女の肢体が露わになり、白い素肌を夕日がオレンジ色に染める。少年は左手を少女に向けて延ばし、必死に少女の名を叫んでいる。男のナイフを逆手に握り直すと、少女の両の太腿を立て続けに突き刺した。鮮やかな赤色の血液が傷口から噴き出し、少女の意識が急速に覚醒へと向かう。しかし、少女が目覚めるよりもさらに速く、男の全身は少女の血液で真紅に染まっていく。少年は無我夢中で叫び続けた。少女の体には幾度もナイフが突き立

てられ、少女の体から噴き出す血は既に勢いを失っている。少女の命は、まさにこの瞬間に燃え尽きようとしていた。そして、少女の肉体が生命活動が停止してから、魂が肉体を離れるあまりにも僅かな瞬間。もはや叫ぶことすら出来ず、意識を失いかけていても、懸命に少女の名を呼ぶ少年の掠れた声は、確かに彼女の心へと届いた。

プロローグ・五月一十四日（後書き）

この作品は『小説をほとんど読んだことの無い人でも気軽に読める作品（たぶん世に言つリノベル）』を目指して書いています。稚拙な文章ですが、引き続き読んでいただければ幸いです。

【1】再会

「ん……ううん……」

ブラインドの隙間から漏れる日の光を浴びて、少年の目がうつすらと開いた。少年はベットの上で数回寝返りをうつて眠気と格闘していたが、しばらくして気合と共にベッドから転がり落ちる。半分寝た状態のまま床をズルズルと這いずって、開け放しにしてあるドアを抜け廊下をさらに進む。階段も器用に寝たまま降りて行き、たっぷり時間を使って洗面所に到着した。目的地に到着しても彼はううう~と唸つていて、一向に起きる気配を見せない。

(「ラツ、蓮！　いいかげんに起きなさい！)

少年の頭の中で、何度も聞いた言葉が蘇る。彼女はいつも早起きして朝食を作り、朝に弱い自分を起こしてくれた。少年の目に涙が込み上がる。普段は考えないようにしていても、寝惚けた頭は勝手に彼女のことを思い出してしまつ。

一緒に遊んだ事、くだらない理由で喧嘩した事、その後仲直りした事、彼女が殺された時の事。

右腕の傷痕が疼く。何故自分は何も出来なかつたのか。幾度となく繰り返した後悔。こうしている今も、彼女がひょっこり帰つてきそうな気さえする。少年はぶんぶんと頭を振つてくだらない幻想を振りほどぐ。なんとか気を取り直して立ち上がると、今にも泣きそうな顔をした自分が鏡に映つていた。冷たい水で顔を洗い、洗面所を後にした。リビングに移り、戸棚からカップ麺を取り出してポットのお湯を入れた。出来上がるまではしばらく何もせずぼーっとしている。

「もしもーし」

ああ、幻聴が聞こえる。

「ねーつてばー」

彼女はもう戻つてこないので。

「いいかげん気付いてよー」

今日は厄日だ、起きてからずっと幻聴が止まない。

「おー————い！」

「氣のせいがだんだん大きくなっている氣がする。

「そろそろ本氣でおこるわよー！」

俺はとうとうおかしくなってしまったのだろうか。

「もう！　これでどうだ！」

次の瞬間、少年の頭にマグカップが落下した。骨と陶器のぶつかる鈍い音。少年は痛みのあまり座っていた椅子から転がり落ちた。頭を押さえ、涙目で後ろを振り返る。そこには、ふわふわと空中に浮かぶ半透明の人間の姿があった。

「名伏蓮くん、あたしの名前を言つてみたまえ」

少女は親指で自らの胸を指しながら、芝居がかつた口調で少年に問うた。

「香奈…」

少年は状況が理解できていなまま、啞べみつて少女の問いに答えた。

「はい正解。明るく『元気な上円香奈ちゃん』でーす」

「いえい、ヒーヒースサインを突き出したかと思つと、今度は不満気に頬を膨らませる。

「それにしても蓮、ちょっとあたしがいなかつたからつてこくらなんでも酷過ぎよ。掃除くらい自分でしなさいね」

確かにこの家は汚れている。玄関にはゴミ袋が散乱し、キッチンには食器が詰まれ、洗濯物もたまっているし、床にはほこりが積もつている。だがしかし、そんなことは少年にとって全くどうでもいいことである。少女の言葉が全く聞こえない様子の少年は、ただ呆けた表情で少女を見つめるだけである。その視線に気付いた少女は、怪訝な顔で少年に詰め寄った。

「なによ？　あたしの顔になにかついてる？..」

少しして、少年はようやく口を開いた。

「本当に、本当に香奈なのか？」

「だからさつきからそういうてるじゃない。人の話ちゃんと聞いてた？」

「ああ。間違いない、本物の香奈だ。香奈が帰ってきたんだ。夢なんかじゃない。これは紛れもなく現実。

「ちょっと、黙つてないでなんとか言いなさいよ」

その言葉に、少年は笑顔で返した。そして、たつた一言だけ少女に伝えた。その一言こそが、少年の最も伝えたいこと。最も素直な、心からの言葉。少女もまた、同じくして答える。

「おかいり、香奈」

「ただいま、蓮」

二人の顔に、以前と同じ笑顔が浮かんだ。

【2】放浪

夜の街を一人で歩く。服も、靴も、その体すらもボロボロになりながら。おぼつかない足取りで歩き続ける彼は、周囲の人間からは浮浪者のようにでも見えるのだろう。ある者は同情、ある者は嘲笑、ある者は怪奇に出会ったような顔で遠巻きに彼を見ている。そんな中、三人の少年が彼に近付いてきた。三人はそれぞれがいかにも不良といった服装をしており、軽薄な笑みを浮かべていた。

「ねえおっさん、クスリ買わない？」

彼は答えない。彼は少年達の言葉を無視して前に進む。否、彼の耳には如何なる音も届いてはいなかつた。少年達は彼の周りを取り囲むようにして彼の後を追つていく。

「いいのがあるんだよ、今なら安くしてくれ？」

少年達は挑発するような口調で喋り続ける。どうやら彼を麻薬中毒者と勘違いして、ドラッグを売りつけようとしているらしい。だが、なんの反応も示さない彼に、三人は次第に苛立ちを感じだした。

「なんだよ、もうなんかキメてんのかよお？」

「おい、何とか言えよおっさん」

少年の一人が彼の肩を掴む。が、少年の手はバネ仕掛けのように彼の体から離れた。少年が叫び声をあげる。少年の掌は火傷の痕のように皮膚が爛れていた。残りの一人が、彼に殴りかかる。しかし、彼に手が届く一歩手前で何かに足をすくわれるよう転倒した。なんとか両手を地面について顔面を殴打するのは免れた一人だったが、ちょうどその時、側にあつたブロック塀が彼らに向かつて崩れてきていた。背中にコンクリートブロックの受け、もはや悲鳴も出ない二人と、超常現象の目撃者となり呆然としているもう一人を尻目に、彼はひたすら歩き続ける。頼りは遙か遠くから感じる微かな気配。強靭な精神力でもつて傷ついた体を引きずつていいく。彼の腕の中に一冊の分厚い本が抱かれていた。ほとんどうめき声のように呟く。

「…渡さねば。なんとしても…守らなくては
自らの使命を果たすべく、彼は夜の街を一人で歩く。

【3】推理

「それじゃあ、香奈は何にも分からぬのか？」

時刻は昼過ぎ。香奈はリビングで蓮に状況を説明していた。といつても、彼女自身状況を把握できているわけではなく、二人で推理ゲームでもやっているような雰囲気だ。

「うん。あの事件があつた日から今日までの記憶は全然ないんだ。気付いたら蓮が隣で寝てたから、とりあえず声をかけてみたの」蓮は口に手を当てて、ぶつぶつと咳きながら考え込んだ。

「つてことは…香奈は一度…でもそれは…まさか…事実ここに…やっぱり…あれは…つまり…そんな…うん…それしか…納得が…」

「ちょっと」

香奈の不満げな声にはつ、と顔を上げる。

「ああ、ごめん。なに？」

「なに？ ジゃないわよ。一人で考えてないであたしにもちゃんと説明してよ。今一番悩んでるのは私自身なんだからね」

言いながらふよふよと天井のあたりに浮かんでる姿は、どう McConnell 目に見ても悩んでるようには見えなが、蓮はあえて触れなかつた。長年の付き合いで彼女の性格は分かつていたし、物事を深く考えすぎる氣のある蓮にとつてはそれが彼女の魅力でもあつたからだ。

「…まあ、とにかく香奈が幽霊つて事は確かだよな」

空中でなぜか背泳ぎを始めた香奈の動きがピタリ、と止まつた。

「私…幽霊なの？」

真顔で聞き返す香奈に、今度は蓮の体が固まつた。しばらく無言で見詰め合う。一人の目は、全く違う意味で『信じられない』と言ひ合っていた。そして、ほぼ同時に二人の口から言葉が飛び出す。

「…なんで？」

またしても一瞬の間。

「幽靈…幽靈ですって？　このあたしが？　ってことはなに？　あたし死んだの？　嘘でしょ！？　まだ十七なのよ！？　まだまだ人生これからなのよ！？　大学入つてたつぱり遊んで就職して結婚して寿退社で子供生んでとにかくいっべいやりたいことあつたのにい！」

一方蓮も、

「お前さつきからずつと浮いてるじゃん！　それに体だつて透けてるだろ！　そもそもお前さつき『あの事件』って言つてたんだよ！？」
普通氣付くだろつづーかお前今までなんだと思つてたんだよ！？
一人揃つて軽くパニックになる。それから數十分して、ようやく二人は落ち着きを取り戻した。向かい合つてソファーに座る。香奈は、色白の細い腕を組んでうーむ、と唸り眉間に皺を寄せた。
「どうやら私が幽靈つていうのは本当みたいね。それにしても…なんで私が幽靈なんかになっちゃつたのかしら？」

「そりゃあ、この世に未練があるからだる。さつきいろいろ言つてたじやないか」

香奈は大袈裟な身振りで蓮の意見を否定した。

「その程度の未練で幽靈になるんならこの世はひとつくに幽靈だらけよ。何かもつと他の原因があるはずだわ」

拳を固めて力説する香奈。しかし、今まで幽靈の存在などこれっぽつとも信じていなかつた蓮は、半ば投げ遣りになつている。
「じゃあいるんじゃないかな？　きっと見えないから分からぬだけれど」

「そういえば、なんで蓮は私の事が見えるの？」

ふと、香奈が小首を傾げて問いかける。

「幽靈は普通の人には見えないものでしょ？　まさか蓮、実は靈能者だつたりするわけ？」

多分に期待の込められた目で詰め寄る。蓮はまさか、と首を振つた。

「香奈だつて知つてるだろ、今の今まで幽靈なんかこれっぽつちも

信じてなかつたんだ。俺が靈能者なわけないじゃないか

香奈はあからさまに落胆し、溜息を吐いた。

「だよねえ……でも、私つていう靈が見えてるのは事実なんだし、ひょつとしたらこの数日で見えるようになつたのかも…」

「だから見えないつて。そういう香奈こそ、他の幽靈とか見えないのかよ?」

言われて、香奈はえーっとなどと咳きながら辺りを見回す。

「…隊長! 周囲に異常はありません!」

香奈は姿勢を正し、蓮に向かつて敬礼してみせる。

「見えないのか…となると俺と香奈にだけ特別な繋がりみたいなものがあるのか…?」

蓮の言葉を聞いて、香奈の顔には瞬時に満面の笑みが浮かんだ。香奈は蓮の腕に抱きつくと（実際は擦り抜けるのでフリだけだが）、蓮の顔を見上げながら急にはしゃぎだした。

「ね、ね、それって、赤い糸つてやつだよ！？ きつとそつ！」

香奈は顔に手を当てて照れながらも、ちらちらと指の間から蓮の顔を伺つている。

「なつ…ばか、少しばらは眞面目に考えろ」

「もへ、嬉しくせに〜〜」

肘で蓮の脇をつつく。実際、蓮の顔は少々赤らんであり、そつけない態度も照れ隠し以外の何物にも見えなかつた。

「と、とにかく、このまま家の中についてもしかたない。ちょっと外出でみよう。もしかしたら他の幽靈が見つかるかも知れないからな」

そう言いつと、蓮は外出の準備のために一階の自室へと上がつていった。一人になつたリビングでポツリ、と香奈は咳く。

「幽靈、か…」

溜め息を一つ、じつと手を見る。青白い肌の向こうには部屋の景色が透けて見えた。

「まったく、無神経なんだから…そこまでハツキリ言つ」とないじ

やない。」

自分が死んだことなど初めからわかつていた。にもかかわらず、香奈は無意識に事実を否定し、拒絶していた。それは、ある意味では正しい。現実から逃避することで、心の平穀が保たれることがある。だが、所詮それも一時だけだ。長引けば長引くほど、現実を受け入れられなくなってしまう。蓮の何気ない一言で、香奈はあつさりと現実へと引き戻された。結果として蓮が香奈を助けたのだ。たとえ蓮にそのつもりが無かつたとしても、その事実は香奈の心に深く刻み込まれた。

「香奈、準備できたよ」

蓮が待っている。香奈は、明るい返事と共に玄関へと飛んでいった。

【4】搜索

家の外に出ても、何も変わった事は無かつた。二人の目に幽霊が映ることもないし、空中をふわふわと泳ぐ香奈を見て驚く人間もいない。

搜索はただの散歩になってしまった。

一人になつてからほとんど家から出なかつた蓮は、久しぶりの運動と割り切つて無心に歩いていた。

面白くないのは香奈である。

初めのうちは上機嫌で喋つていたのだが、何も見つからないまま時間が過ぎるにつれ次第に黙り込んでしまつた。いつになく本気で不機嫌な香奈に、蓮も敢えて話しかけようとはせず、一人は沈黙の中で川沿いの住宅街を歩いていた。

「蓮！ あれ見て！」

突然香奈が叫んだ。蓮は立ち止まって香奈の指差す方向、向こう岸の道路に目を向ける。

「ほら、あそこ！ あれって人じゃない？」

よくよく目を凝らしてみれば、アスファルトと同色の服を着た男が倒れているように見える。言葉を交わす前に、蓮は橋に向かって駆け出した。

「香奈！ 先に飛んで行つて様子を見といてくれ！」

言われたとおり、香奈は川の上を通つて男の元に飛んで行つた。

数分後、息を切らした蓮が戻つてくると、男は既に立ち上がりて香奈となにやら話をしていた。蓮の姿に気付いた香奈は、何事か叫びながら手を振つてくる。

「おーー！ はやくーー！！」

無慈悲にも蓮を急かす香奈。ようやく蓮が一人のもとに到着すると、香奈は笑顔で男に蓮を紹介した。

「おじさん、これがさつき話した蓮」

「やあ、君が蓮君か。はじめまして」

笑顔で手を差し出す。訳が分からない蓮は男を見て呆然としている。男の顔はボサボサに伸びた髪の毛で隠れてしまつていてよく見えない。全身を包んでいる黒い服は異国の物のようだが、大きく破れた箇所が幾つもあり、靴の爪先も穴が開いていた。

「蓮、何ばーっとしてんのよ」

香奈に促され握手を交わそうとする。が、次の瞬間には男は地面に倒れこんだ。

「えっ、ちょ、ちょっと！ 大丈夫！？」

何の前触れも無く倒れた男に触るうとした瞬間、香奈の手に電流のような痛みが走った。咄嗟に手を引っ込め、男と自分の手を見比べる。

「おい、大丈夫か？」

「あ、うん…びっくりしたあ…」

蓮が恐る恐る男に手を伸ばすが、今度は何事も無く触ることが出来た。数回男の背中を叩いて、安全を確認してから蓮は男を背中におぶつた。そのまま家に向かって歩き出す。

「……？」

家に帰る道中も、香奈はずつと怪訝な顔をしたままだった。

【5】介抱

「5」介抱

次に男が目覚めた時には、もうすっかり日が暮れてしまっていた。見知らぬ家のソファーに横たわっている。隣の椅子には畳に出会った少年が黙々と読書していた。はつきりしない頭で少年を眺めていると、少年は男が目覚めたことに気が付いたようだ。

「ああ、気が付いたんですね」

よかつた、と笑いかけてくる。たしか名伏 蓮といったか。それともう一人、元気な娘がいた筈だ。

「あ！ おじさん起きたの！？」

蓮に呼ばれて返事をする声が聞こえる。上月 香奈、彼女はどうも靈であるようだつた。徐々に思考がクリアになつてきた。そうか、自分は彼らの前で倒れてしまつて、そのまま家まで連れて来られたんだな。額に乗っているタオルはまだ冷たい。あの少年が傍で看病してくれていたのか。香奈が男の顔を覗き込む。

「おじさん、大丈夫？ まだちょっと顔色が悪いよ？」

男は苦笑した。これほど真剣に誰かを心配する目を見たのはずいぶんと久しぶりな気がする。

「私はもう大丈夫だ。迷惑をかけてすまなかつた」

男は上体を起こそうとするが、蓮がそれを手で制した。失礼します、と男の額に手を当てる。

「無理しないでください、まだ少し熱があります。よかつたら、今夜はウチに泊まって下さい」

「いや、しかしこれ以上、君達に迷惑をかけるわけには……」

男は遠慮していたが、香奈が男の言葉を遮つた。

「私達は全然平気だよ、どうせ蓮だけじゃこの家の半分も使ってないんだから。こういう時は、遠慮せずに甘えればいいの」

男は少し困惑していたが、同時に心の中で穏やかな温もりが湧い

ているのを感じてもいた。十数年ぶりに触れる人間の思い遣りは、彼にとっては一種のカルチャーショックにも似たものだった。

「食欲はありますか？　お粥くらいなら作れますけど」

連の申し出に一瞬戸惑つたものの、男は快い笑みで返事を返した。

「ああ、それでは遠慮なく甘えさせてもらひよ」

こつして、男は何かと世話を焼かれながら名古屋での一夜を過ごした。

【6】質問

翌日の朝。男が目を覚ますと、香奈が自分の周りをぐるぐると回っていた。仰向けになつて浮いているので、男が起きたことには気付いていないようだ。

「おはよう、香奈ちゃん」

やさしい口調で挨拶をする。声をかけられ、香奈はくるつと体を反転させて笑顔を見せた。

「おはようおじさん！　体はもう大丈夫？」

「ああ、おかげさまでね。もうすっかり元気になつたよ」

立ち上がり、両手を広げながら笑顔を返した。

「それじゃあ、お風呂にでも入つたら？　その間に蓮を起こして着替えを用意させとしてあげる」

そう言つと、香奈は返事を待たずに一階の蓮の部屋へ向かつてしまつた。残された男は苦笑し、風呂場に向かつて歩く。ぼろぼろで穴だらけの服を脱ぎ、細身の体が空気に晒された。見た目こそ細いものの、その体は一切の無駄が排除された理想的な筋肉の付き方をしていた。だが、それ以上に目を引くのは男の全身に残る種類、大小様々な傷痕だ。男の顔以外のほとんどの場所を埋め尽くしている傷はどれも古いものだが、唯一背中の最も大きな傷だけが、やけに真新しい印象の赤色をしていた。首にかけていたペンドントは外さずに浴室に入り、シャワーを浴びる。少しすると、何かが階段を転がり落ちる音が響いた。

浴室を出ると、洗面所には綺麗に折り畳まれた藍染の甚兵衛が置いてあつた。これでは傷が見えてしまう。一人を怖がらせたくは無かつたが、どうせいつかは話すつもりだったので仕方なく着ることにした。男がリビングに戻ると、二人は男の体を見て一瞬驚いたが、すぐにいつもの調子に戻つた。

「おはよう」「さ」します、朝「」飯できますよ」

何事もなかつたかのように告げる蓮に、男の方が驚かされた。今まで彼の体を見た者は、傷の話を聞いたがるか避けるかして、どちらにせよいつもその事を意識していた。ところが、この一人には全くそんな様子は無く、本当に傷のことを気にしていいように思えた。

「おじさん？」「」飯食べないの？」

香奈の声で現実に引き戻された。短く返事をして椅子に座る。蓮がいたります、と言つて食事を始めたので、男もそれに倣つた。朝食は白米に味噌汁だけという簡単なものだったが、ダシの効いたワカメと豆腐の味噌汁はなかなかに美味しいものだった。

朝食が終わつたところで、男は自分の仕事を始めることにした。「さて、二人とも。少し話しておきたいことがある」

ずっと穏やかに笑っていた男の雰囲気がガラリと変わったことに一人は驚いていたが、男の真剣な眼差しを見て、しだいに蓮の表情も同様になつていく。

「これから私がするいくつかの質問に答えて欲しい。どうしても嫌なら強制はしない」

「分かりました」

「なに？ なに？ 心理テストかなにか？」

「香奈、少し黙つてて。聞かれたことにだけ答えてくれ」

蓮が香奈に言い放ち、香奈は不機嫌に頬を膨らませる。少々冷たいかもしれないが、香奈のペースで話してややこしくなるよりはマシだ。男は二人を交互に眺め、まず香奈への質問を始めた。

「では、始めよう。香奈ちゃん、君は幽霊だね？」

「あ、うん。よくわかんないけどたぶんそうだと思つ」

「幽霊になつたのはいつ頃？」

「なつたばかりだよ、昨日の朝に田が覚めたの」

「では、他の幽霊は」

「全然、ちつとも見えない」

「そうか…蓮くん、君は？」

「見えません、香奈以外は」

男はなるほど、などとなにやら頷いているが一人には質問の意図がまるで分からぬ。なにか考えている様子だったが、男はすぐに次の質問に移つた。

「香奈ちゃん、言いにくいかもしれないけど、君が死んだ日の事をなるべく詳しく教えてくれないか」

香奈は驚いて、男の顔を見つめたままの状態で固まつてしまつた。まさかそんなことを聞かれるとは思わなかつたのだろう。だが、男の顔はあくまで真剣だつた。香奈がつまく言葉にできず黙つていると、蓮が男に提案した。

「おじさん、それなら僕が話します。僕は一部始終を見ていましたし、香奈は気絶していたので僕のほうが詳しく話せます」

「じゃあそうしてもらおうか。蓮くん、話してくれ」

蓮は首肯し、事件について知つていて話を全て話した。その日は一人で学校に残つて勉強していたこと。事件の起こつた場所と大体の時刻。その事件が連續通り魔事件で、同じ日に何人か殺された事。そして、香奈が死ぬ瞬間の事。蓮が話を終えると、リビングにはしばし静寂が降りた。黙り込んでいる男の目を真つ直ぐに見据えて、蓮は再び口を開く。

「おじさん、僕達はあなたの質問に答えました。今度は僕から質問させてくれませんか？」

「ああ、別にかまわないよ」

男は相変わらず重苦しい顔のままで頷いた。

「では聞きます。あなたはいつたい何者ですか？」

男はここにきてようやくその表情を崩した。しかし、口の片端を上げて笑う男が纏う空気は逆に重く、冷たくなつていいく。香奈はいつの間にか座っていた椅子を離れて、蓮の側に移つていた。

「…どういう意味かな？」

「そのままの意味です。僕達はあなたの事を何も知らない。あな

たの名前も、あなたが何故倒れていたのかも、何故僕達にこんな質問をしなければならないのかも」

蓮と男が睨み合う横で、香奈はただ子犬のように身を縮めている。

「説明、してくれますか？」

男は無言で椅子から立ち上がり、一人から離れて庭の見える窓の側まで移動した。

「私は逃げていたのだ」

蓮達に背中を向けたままで、男は蓮の問いに答えた。

「私はある組織に所属しているんだ。ところが、任務の途中で何者かの襲撃を受けてしまってね。なんとか退けたものの、こちらもかなりのダメージを受けて倒れてしまった。そこで君達に助けられた」

「『どう』とは、その組織といつのは幽霊に関係したものなんですか？」

「ああ、組織の目的は全ての靈を統率することさ。だから新しく靈になつた者がいたら、その情報を組織のデータベースに登録するのさ」

「よくわかんないけど、要するに役所みたいなもの？」

振り向いた男の顔が幾分穏やかになつていて、少しだけ緊張の解けた香奈が口を開いた。

「ちよつと違うけど、まあそんなようなものさ」

「任務、というのは？」

「それは機密事項だ。君に教えるわけにはいかない」

男の顔がまた少し厳しくなる。蓮は男の言葉を無視して質問を続ける。

「あなたが個人的に恨みをかつているとは考えにくい。襲撃者の目的はあなたの任務を妨害することだとしたら、あなたが新しく靈になつた者に会うと困る者がいることになる。僕達のような人があなたの所属している組織の管理下に置かれるのはそんなに重要なことなのですか？　誰かを襲つて傷つけなければいけないほど？　そ

れともあなたには別の任務もあるのですか？」

しばしの沈黙。やがて男は下を向いて頃垂れたような姿勢のままで肩を揺らしだし、男の息も笑い声として聞き取れるほど大きさになつていった。押し殺すように笑い続ける男の様子は何か不気味なものを感じさせるものだつた。

「蓮くん、君は本当に頭がいい」

そう言つて、男は右手で髪を搔き上げる。窓の外から差し込む朝の光の中で、男の青い瞳がいつそつ輝きを増した。

【7】追手

「君は、さつきの私の話を全然信じていないのだろう?」

愉快なショウでも見ているかのような男の笑いを、何故か蓮は不気味に感じた。なるべく感情が出ないようにして、蓮は男に言葉を反す。

「全く、というわけではありませんが、大部分についてはその通りです」

「別に気にすることは無いよ、確かに私は嘘を吐いていたのだから」「あつさりと、男は自ら偽りを認めた。

「今度こそ本当の事を話そう。私の任務はある物を探して、処分することだ。一度は見つけたんだが、あと一歩というところで逃げられてしまった。その時のダメージで倒れてしまい、君達と出会ったのさ」

蓮は男を睨みつける。珍しく不機嫌な彼を、香奈は意外そうに見つめていた。

「ある物とはなんですか?」

「なんのかは分かつてない。ただ、それは世界を滅ぼしかねない力を秘めている。組織では、そういう強い力を持つている物を回収し、封印しているんだ。それらが悪用されたりすることのないようにな。因みに、さつき説明した靈の管理というのも嘘ではないよ。」

男の笑顔は崩れてはいない。しかし、男の一人に対する視線は確実に鋭さを増していた。

「と言つたところで、蓮くんは信じてなどいのだろうね」

男はわざとらしく溜息を吐き、両手をあげて降伏のポーズをとつてみせた。その仕草はまるで道化のようである。

「蓮くん、僕の言葉はどの位嘘なのだと思う?」

「わかりません。あなたの言葉はどれも胡散臭すぎる」

「ま、君にとつてはそうだろうね。でもね蓮くん、実は僕は殆ど嘘は言つてないのだよ。すこーしだけ言つてない事があるだけさ」

男の軽口にも、蓮は反応を示さない。男は少しつまらなそうな、

残念そうな表情を見せた。

「まいつたね、これさえも信じてもらえないのか。もう何を言つても無駄かな？」

「名前」

短く、呟くように答える。

「あなたの名前くらいは信じてあげますよ」

男の表情が一瞬固まって、再び愉快そうに笑い出す。

「そうか、そういうばまだ名乗つていなかつたね。改めて自己紹介しよう、僕はノーブル。一応組織ではナンバー3の位置にいるんだ」道化は、深くお辞儀すると窓を開けて名伏家の広い庭に出た。後ろを向いたまま、蓮達に語りかける。

「一つ忠告しておこう、今すぐ家中の窓と扉を閉めて鍵をかけたほうがいい。そして暫くは外へ出でこないようにしてないと」

死んじゃうよ

その言葉と同時に、男がいた場所に大きなクレーターができた。轟音が響き渡る。床が揺れる。蓮はたまらず尻餅をついた。痛みに顔を歪めながら香奈に向かつて叫ぶ。

「香奈！ 窓を閉めるんだ！」

香奈はすぐに窓を閉め、鍵をかけた。それから二人は男に言われたとおりに窓と扉に鍵をかける。再びリビングに戻つて、窓から少し離れた所から庭の様子を窺う。この数分間で、先程と同じ轟音が何度も聞こえてきた。それと同じ数だけ、庭にはクレーターが増えている。加えて、芝生や壁が所々黒く焦げていた。二人は唖然として庭で起きている事を眺める。一人の男が庭を縦横無尽に駆け巡り、何の前触れも無く壁や地面が抉られたり焼け焦げたりする。しばらくして、フリーズしていた頭がようやく働き始めた。これが彼の言つていた『任務』なのだ。碧眼の男 ノーブルと争っているの

は、もう春だというのに薄汚れたコートを着込んでいる髭面の男。二人の動きはあまりにも速く目で追うのがやつとだったが、よく見ればクレーターと焼け焦げはそれぞれノーブルと髭面の男を狙つて現れているようだ。ノーブルが叫ぶ。

「今度こそ渡してもらうよ！」

今までよりも広範囲に焼け焦げが広がる。同時に火花のようなものが辺りに散つた。どうやら焼け焦げの正体は電撃だつたらしい。地面を這う電撃を髭面の男は横方向に跳躍して避ける。

「お前達のようなペテン師集団に渡すわけにはいかん！」

ノーブルの周りに小さなクレーターが無数に出現し、彼の動きを一瞬だけ止める。その一瞬の間に、髭面の男は長大な剣を振り下ろした。ノーブルは後方に飛び退るが、一瞬間に合わず左足に傷を負ってしまった。

「踏み込みが浅かつたか」

髭面の男がノーブルを見据えて剣を構え直す。ノーブルは顔を歪めて忌々しげに舌打ちした。

「…此処では分が悪い、退かせてもらいうよ」

そう言い残すと、ノーブルは壁を飛び越えて名伏家から去つていった。

ノーブルの姿が消えても、髭面の男は動こうとしなかった。蓮と香奈は家の中から窓越しに様子を伺っていたが、いつまでも動こうとしない男を不審に思い、外に出てゆっくりと近づいていった。男は庭の真ん中で頃垂れたままピクリとも動かない。だが、一人が男に手が届く程の距離まで近づいた時、男の唇が微かに揺れた。

「え？ なに？」

香奈が男の顔に耳を寄せる。男の声は、静かにそよぐ風の音にすら搔き消されてしまいそうなほど小さかつた。それでも何とか聞きとつた内容を蓮に伝える。

「なんか、蓮に用事みたい」

「俺に？」

警戒しつつも、蓮は男の顔に耳を近づけた。

「……君が名伏の後継者か」

男の言葉は質問というよりは、自身への確認に近かつた。蓮が戸惑っている間に、男は言葉を紡いでいく。

「少年よ、私はこれより罪を犯す。私は私の、いや、私が背負う数え切れない人々の望みを、使命を果たすために君を巻き込む。たとえ君に怨まれようとも、私はやめるつもりは無い。これは君にしか出来ない事なのだ。」

男の声は小さくままだつたが、蓮はその言葉の中に力強い意思を感じていた。

「少年よ、よく、聞くのだ、ワレフレは、長いあ、いだ、、、たたか、、、、が、、おそらく、、、もう、、じか、、、がな、、しょ、、た、、ん、、だ、、、、、、、、、、、」

男の声は所々ノイズが混じって、やがて完全に聞こえなくなってしまった。ノイズが増えるにつれて男の体はその存在自体が希薄になり、最後にはまるで霞のように消え去った。蓮も香奈も、何が起

こつたのか理解出来ずに田を白黒をせでいる。

「何、今……？　おじさんほどに行つちやつたの？」

蓮は無言でその場に屈みこんだ。ほんの数秒前まで男が立つていた筈の場所を見つめる。そこには、一冊の古ぼけた分厚い本が落ちていた。蓮は本を拾うと、しばらく表紙を触つたりしていたが、不意に立ち上がりて香奈の方に振り返つた。

「……部屋に戻ろう、香奈。落ち着いて、ゆっくり考えたい」

そう言つと、香奈の返事を待つことなく家中に戻つていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0617a/>

守護霊始めました

2010年10月28日04時53分発行